〔論　文〕

# 子ども時代の身体接触と大学生の対人関係との関連

The Relationship between Parental Touch
and Interpersonal Relationship of College Students

藤　田　　文
Fujita Aya

## ABSTRACT

The purpose of study 1 was to investigate the relationship between parental physical touch and the expectancy for social support of female college students. Participants in study1 were 146 female college students. They were asked to complete the questionnaire on parental physical touch in childhood and the expectancy for social support and social skills. The results showed that memory for parental physical touch is positively correlated with the expectancy for social support. The purpose of study 2 was to investigate the relationship between parental physical touch and friendship physical touch. Participants in study 2 were 40 female college students. They played the game which needs to touch each other. And they were asked to complete the questionnaire on parental and friendship physical touch. The results showed that memory for parental touch is positively correlated with friendship touch in everyday situation but is not with that in the game situation. These results indicated that parental physical touch in childhood effected the interpersonal relationship of college students.
Key words :physical touch, expectancy for social support, female college students,

子ども時代に両親から受けた身体接触の量は、青年期になってからの対人関係やコミュニケーションのあり方と関連があるのだろうか。広辞苑によると身体接触とは、親と子どもなどの肌の触れ合いによる親密な交流である。子ども時代の親子のコミュニケーションにおいては、言語的なかかわり以上に非言語的な身体接触も多く、その影響は大きいと考えられる。山口（2004）では、愛情というのは、心にもともと備わっているように思われがちだが、実は、肌に触れる事によって芽生えてくるものであると述べられ、身体接触の重要性が多く指摘されている。Montagu（1971）でも、動物や人間を対象にした多くの研究から、幼少期や児童期に接触の満足を得ることは、その後の健全な行動の発育には欠かせないものだと述べている。また、従来いくつかの研究で、子ども時代の身体接触が成人後の心理的不適応や様々な感情に影響を及ぼすことが示唆されている。

山口・山本・春木（2000）は、幼い頃に両親から受けた身体接触量の想起と、現在の心

理的不適応との関連について検討した。対象者は、健常群と臨床群だった。健常群は大学生であり、臨床群は、病院の心療内科に来院した外来患者で、摂食障害、適応障害、身体表現性障害、不安障害、気分障害、人格障害の症状を示すものであった。調査の結果、男性は心理的不適応と両親からの身体接触量との関連は見られなかったが、女性では関連が見られた。つまり、女性では心理的不適応の高い者ほど両親からの身体接触量を低く評価していることが示された。

また、山口（2003）は、乳児期における母子の身体接触が将来の攻撃性に及ぼす影響について検討した。調査対象を、攻撃性が最も高まると思われる思春期である女子高校生とその母親とした。調査の結果、身体接触低群が、高群よりも言語的攻撃といらだちの評定値が高いことが明らかになった。つまり、乳児期の母子の身体接触は、児童期だけではなく、思春期にわたってその子の攻撃性に影響を及ぼしていることが示された。この傾向は特に女性において顕著であること、また攻撃性の中でも特に、普段からイライラしてカッとなりやすい情緒的な不安定感に影響を及ぼしている事が示された。

これらの結果から、親子の身体接触が重要であることは、明らかにされつつある。しかし、従来の研究では、子ども時代の親子の身体接触が、現在の大学生の対人関係にどのように影響を与えているかは明らかにされていない。根ヶ山（2006）では、母子の身体接触は、子どもの様々な発達を促進することにつながり、それを遊びという楽しい雰囲気の中で共育することで、母子が交歓し絆を強めることに結び付いていると指摘している。このことから、子ども時代の親子の身体接触は、対人関係におけるサポート感と関連してくるのではないかと推測される。また、両親からのサポート感と同様に、対人的な絆への信頼感が生じて友人からのサポート感とも関連するのではないだろうか。さらに、この友人からのサポート感をもとにした対人スキルまで影響を及ぼしているとも考えられる。

そこで、研究１では、幼い頃の両親からの身体接触の量が、大学生の対人関係にどう影響を与えているかをサポート感・対人スキルとの関連から検討する事を目的とする。

## 【研究１】

### 目　的

子ども時代の両親からの身体接触の量が、大学生の対人関係にどう影響を与えているかを、親からのサポート感、友人からのサポート感、対人スキルとの関連から検討する事を目的とする。

### 方　法

対象者：本研究の対象者は、大学１年生106名と２年生40名の計146名で、全員女性だった。

手続き：授業時間を利用して、集団で一斉に質問紙調査を行った。質問紙の内容は、対人サポート、対人スキル、両親から受けた身体接触の量に関するもので、具体的には以下の通りだった。

（1）対人サポート

現在の対人サポートの大きさを測定するために、久田・千田・笹口（1989）の学生用ソーシャルサポート尺度を採用した。ソーシャルサポートを受ける対象は、「両親」と「友人」に限定した。サポートの内容は、「あなたが落ち込んでいると、元気付けてくれる。」「普段からあなたの気持ちをよく理解してくれる。」「あなたがする話にはいつもたいてい興味を持って耳を傾けてくれる。」などの14項目だった。各項目について、普段次のような援助を両親・友人からどの程度受けていると思うか、その程度をそれぞれ評定してもらった。評定は、「4．きっとそうだ」「3．多分そうだ」「2．多分違う」「1．絶対違う」の４段階だった。

（2）対人スキル

現在の対人スキルを測定するために、菊池（1988）によって作成された「KISS－18」の質問項目を採用した。質問項目は、「対人スキル」に関する「他人と話していて、あまり会話が途切れない方ですか。」「他人を助けることを上手にやれますか。」「相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。」など18項目だった。各項目の内容が、自分にどれだけ当てはまるか、その程度を評定してもらった。評定は、「5．いつもそうだ」「4．たいていそうだ」「3．どちらともいえない」「2．たいていそうでない」「1．いつもそうでない」の５段階だった。

（3）両親から受けた身体接触

子どもの頃の両親からの身体接触の量を測定するための、質問項目を作成した。子どもの頃は小学校低学年までと限定した。質問項目は山口（2003）を参考に作成した。この研究は、母親に子どもとどの程度身体接触をとったかを尋ねるものであった。しかし、本研究では子ども自身に尋ねるものであるので、質問項目を子ども側からの表現に変更した。また、「子どもと身体接触をとるように心がけた。」という項目は漠然としているので、「耳かきや歯磨きをひざまくらでされた。」「気分が悪いときにはさすられた。」という具体的な内容に変更した。

質問項目は全部で10項目だった。各項目の身体接触が、子どもの頃（小学生低学年まで）に両親からどの程度されていたか、その程度を評定してもらった。評定は、「4．よくされた記憶がある」「3．たまにされた記憶がある」「2．あまりされた記憶がない」「1．全くされた記憶がない」の４段階だった。

## 結　果

（1）親サポート・友人サポートの平均点

対象者の全体的な親サポート得点、友人サポート得点、対人スキルの得点の平均点を算出した。その結果、親サポート評定値の平均は3.12点で、友人サポート評点値の平均は3.30点だった。この結果から、大学生は全体的に、親からのサポートよりも友人からサポートを多く受けていると感じていることが明らかになった。

（2）両親からの身体接触の量とサポート感・対人スキルとの関連

子ども時代の両親からの身体接触の量と現在の親や友人からのサポート感、また対人スキルとの関連を検討するために、スピアマンの相関係数を算出した。その結果を表1に示した。表1より身体接触の量は、親サポート（r=.49,p<.01）と友人サポート（r=.31,p<.01）と対人スキル（r=.17,p<.05）すべてと有意な正の相関が見られた。また、親サポートと友人サポートで有意な相関が見られた（r=.42,p<.01）。さらに、対人スキルと親サポート（r=.29,p<.01）、対人スキルと友人サポート（r=.26,p<.01）にも有意な相関が見られた。つまり、両親からの身体接触と親や友人からのサポート感とは関連があることが明らかになった。また、相関は低いものの、両親からの身体接触と対人スキルにも関連があることが示された。

次に、身体接触の各項目と親サポート・友人サポート・対人スキルとの関連を検討するために、それぞれの相関係数を算出した。その結果、親サポートと全ての身体接触項目で有意な相関が見られた。特に、「ほめる時、頭をなでられた。」（r=.39,p<.01）、「泣くと、抱きしめられたり頭をなでられた。」（r=.36,p<.01）、「気分が悪いときにはさすられた。」（r=.34,p<.01）の項目で相関が強かった。

また、友人サポートとは、「接触遊びをした。」と「頬ずりやキスをされた。」を除く全ての身体接触項目で有意な相関が見られた。特に、「泣くと、抱きしめられたり頭をなでられた」（r=.35,p<.01）の項目で相関が強かった。対人スキルに関しては、すべての身体接触項目で相関は低く、「接触遊びをした」（r=.18,p<.05）と「ほめる時、頭をなでられた」（r=.17,p<.05）のみで、有意な相関がみられた。

**表1　身体接触の量とサポート尺度・対人スキル尺度との関連**

| | 身体接触 | 親サポート | 友人サポート | 対人スキル |
|---|---|---|---|---|
| 身体接触 | | 0.49** | 0.31** | 0.17* |
| 親サポート | | | 0.42** | 0.29** |
| 友人サポート | | | | 0.26** |
| 対人スキル | | | | |

＊は5％水準、＊＊は1％水準で有意（両側）を表す。

（3）身体接触の内容

身体接触の内容を検討するために、10項目それぞれで評定値の平均点を算出した。その結果を表2に示した。表2より、「お風呂に一緒に入った。」、「手をつないだ。」、「気分が悪いときにはさすられた。」、「抱っこやおんぶをされた。」の平均点が高かった。どちらかというと日常生活の中で自然に行われているような身体接触に関しては、多く行われていた。それと比較すると、「ほめる時、頭をなでられた。」と「泣くと、抱きしめられたり頭をなでられた。」のような出来事が生じた時に行われる身体接触は少なかった。また、「頬ずりやキスをされた。」の平均点は、低かった。

表２　幼い頃（小学校低学年まで）に受けた身体接触の量

| 項目 | 平均評定値 |
|---|---|
| ①お風呂に一緒に入った | 3.64 |
| ②手をつないだ | 3.43 |
| ③気分が悪いときにはさすられた | 3.43 |
| ④抱っこやおんぶをされた | 3.41 |
| ⑤耳かきや歯みがきをひざまくらでされた | 3.35 |
| ⑥添い寝をされた | 3.28 |
| ⑦接触遊びをした　例：くすぐり遊びなど | 3.20 |
| ⑧ほめる時、頭をなでられた | 2.76 |
| ⑨泣くと、抱きしめられたり頭をなでられた | 2.75 |
| ⑩頬ずりやキスをされた | 2.35 |

## 考　察

本研究の目的は、子ども時代の両親からの身体接触の量と、大学生の両親と友人からのサポート感・対人スキルとの関連を検討することであった。

両親からの身体接触の量は親サポート感と友人サポート感と対人スキルすべてに有意な正の相関があった。子ども時代に両親からの身体接触が多いと大学生になってからも親や友人からサポートを受けていると感じていることが示された。従って、子ども時代の親子の身体接触はのちの対人関係に影響を与える重要なものであることが示唆された。

さらに、身体接触の各項目で特に関連の強かったものは、「ほめる時に頭をなでる」「泣いた時に抱きしめる」など、感情的場面での身体接触だった。このことにより、感情的場面の身体接触の影響は大きいものだと考えられる。身体接触の機能については、山口（2004）でも述べられている。例として、悲しんでいたり、落ち込んだりしたときにそっと肩をなでてもらうと元気になったという経験が挙げられる。このように感情的場面において、身体接触だけで感情が変化するということが示されている。

過去の両親との身体接触がさらに、友人サポートと関連していた。これは、過去の両親との身体接触が基礎となり、人に対して信頼感や安心感が芽生えて、現在、友人にもサポートされていると感じるのだと考えられる。また、両親からの身体接触が対人スキルとも弱いながらも関連がみられた。やはり、過去の両親との身体接触を基礎とした信頼感や安心感があるからこそ、他人と積極的に関わり、スキルがうまく身についたのだと考えられる。

今後の課題として、対象者が質問紙に答える際、現在の親子関係が良好な対象者が、幼いころの親子関係も良好だと思い込み、答えている可能性が挙げられる。また、対象者の記憶をもとに答えてもらったので、正確な結果かどうかは曖昧な部分もあると考えられる。今回は子どもを対象にして尋ねたが、親子両方を対象にする必要もあるだろう。

## 【研究２】

### 目　的

研究１の結果から、子ども時代に両親から身体接触を多く受けた人ほど、親や友人からサポートされていると感じている人が多いことが明らかになった。つまり、両親からの身体接触は、様々な対人関係において重要であると考えられる。しかし、幼いころの両親からの身体接触が、大学生の友人との身体接触にどのような影響を与えるかについては検討されていない。

従来の大学生の友人関係に関する研究では、「活動的側面」（「一緒にバイトに行く。」「相手の家に泊まる。」など）、「感情的側面」（「友達と気持ちが通い合っている。」「自分が本当に友達と思われているか気になる。」など）、「認知的側面」（「友達に心を打ち明ける。」「１人の友達と仲良くするよりはグループで仲良くする。」など）から関係性を調べたもの（吉本・渡邉,2001）や、信頼感と依存（「〇〇さんのことを信頼している。」「本音で話をした。」）からコミュニケーションの在り方を調べてもの（高橋・松原・渡辺,2004）がある。このように、友人関係についての研究は多く行われているが、友人との付き合いの中で、どのような身体接触（コミュニケーションにおける肌と肌との触れ合い）が行われているか、また両親から受けた身体接触の量が、現在の友人との身体接触的なコミュニケーションにどのような影響を与えるかについては、ほとんど研究がない。

現在では、メールやネット上でのコミュニケーションが主流になり、会わなくても連絡が取れ、関係が直接的ではなく間接的になり、肌と肌が触れ合う機会も自然に減少したと思われる。しかし、日常での友人関係を考えると、友人同士でも身体接触は重要であると考えられる。何気なくつつきあったり、軽くたたいて笑いあったりじゃれあったりと、友人同士でも身体接触を行っており、それが親しみの表現となっているのではないだろうか。従って、友人関係における身体接触についての研究をしていく必要があるだろう。

そこで、研究２では、両親から受けた身体接触の量が、現在の友人との身体接触にどのような影響を与えるかについて検討することを目的とする。

まず大学生がどのくらい友人と身体接触をとっているかについて、実験的な状況と日常場面から検討する。実験的な状況では、必然的に友人と身体接触をしなければならないゲーム場面を設定する。そして、このゲーム場面に対する抵抗感を１つの指標とする。また、実際の身体接触の量を測定するために、普段の友人とのコミュニケーションがとれるような自然な場面を設定し、自由に遊んでもらい、その場面を観察する。さらに日常場面で、どの程度友人と身体接触をとっているかについての質問紙調査も行う。幼いころの両親からの身体接触の量が多かった人は、少なかった人よりも、友人との身体接触を好み、身体接触の量も多いと仮定する。

また、友人との身体接触において、相手に触れることと相手から触れられることに違いはあるかについても検討する。山口（2006）では、大学生を対象に調査を行い、身体接触への抵抗感が高い者ほど情緒不安定であり、心身の健康度が低いことが明らかになった。特に女性にこの傾向が強いことも示された。しかしここでは、触れることと触れられることは区別されていなかった。相手に自分から触れていくことは行っていても、相手に触れられることには抵抗感があったり、逆に、相手に触れられることに抵抗感はないが、自分

から触れることはあまりしなかったりというようなことがあるのではないだろうか。従って本研究では、友人との身体接触における触れることと触れられることの関係を検討することを目的とする。

## 方　法

対象者：本研究の対象者は、大学２年生の40名で、全員女性だった。この対象者を同じゼミに所属しており、日ごろ親しくしていると考えられる４人組にした。

課　題：本研究では、以下の３つの課題が設定された。身体接触への抵抗感を持つのかどうかを調べるため、手さぐりゲームと手当てゲームの２つのゲームを採用した。また、友人とのコミュニケーション場面での身体接触の頻度を測定するために、箱庭を実施した。それぞれの具体的内容は以下の通りだった。

（１）手さぐりゲーム

このゲームは、株式会社タカラ「ニュー手さぐりゲーム」だった。このゲームは、本体ボックス（図１参照）、手さぐり小物と手さぐりカード（図２参照）の３つで構成されている。本体ボックスの中へ手さぐり小物を入れ、本体ボックスをよくふる。実験者が手さぐりカードを読み上げながら本体ボックスの中心におく。対象者は、ボックスの中に片手を入れて、中心におかれたカードのイラストと同じ小物を手さぐりで探さなければならない。この時、ボックスの中で、友人との手が触れ合うゲームである。探し当てたものは箱の外に出し、探し当てた人のそばにおいて置くようにした。すべて探し当てたら各自でとった小物の数を数えて、１番多く当てた人の勝ちとなる。24個の小物が全部なくなったところでゲーム終了である。このゲームは２回行われた。

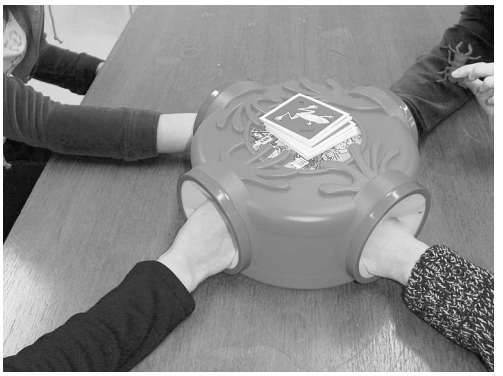

図１　手さぐりゲーム（本体ボックス）

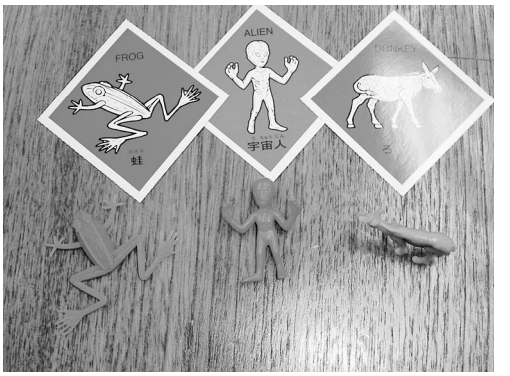


図２　手さぐりゲーム（カードと小物）

（２）手当てゲーム

このゲームは、実験者が指示した人（以下、当てられる人とする）を、手の感覚だけで当ててもらうゲームである。このゲームをするにあたり、ホワイトボードで手だけ出せる壁をあらかじめ作っておく。実験状況は、図３に示されている。

ゲームは２グループ同時に行う。まず、当てられる人の手の感覚を覚えてもらうために、当てられる人と、当てるグループ全員が握手をする。次に、当てられる人を含む、４

人の当てられるグループ全員がホワイトボードの裏に隠れ、手だけを出す。当てるグループは目隠しをし、実験者の誘導で、１人ずつ当てられるグループ全員の手を握っていく。当てるグループ全員が握り終えたら、当てられるグループは表に出てくる。当てるグループは目隠しをはずし、何番が当てられる人かをグループで相談して当てる。その後、答え合わせをする。

次に、当てるグループと当てられるグループを交代して、同じようにゲームを行った。両グループとも、２回ずつ当てる役と当てられる役を行ったので、ゲームは合計４回行った。

（３）箱庭

箱庭とは、一般に箱庭療法で使われるものである。必要な用具は、砂箱（サイズ：縦57cm×横72cm×高さ７cm）と用具（人物・動物・建物・乗り物・点景物・樹木・砂など）である。個室に箱庭を準備しておき、グループ４人で一緒に、10分程度箱庭で自由に遊んでもらった。実験状況は、図４に示されている。

図３　手当てゲーム

図４　箱　　庭

手続き：１グループは４名で構成されていた。実験は２グループ同時に行った。一方をＡグループ、他方をＢグループとした。Ａグループはまず、手さぐりゲームを行い、次に箱庭の順で行った。Ｂグループは逆の手順だった。２グループとも手さぐりゲーム終了後、２グループ同時に手当てゲームに参加してもらった。実験終了後に質問紙に答えてもらった。その手順を表３に示した。また、手当てゲームの具体的な流れについては表４に示した。また、手さぐりゲーム、箱庭、手当てゲームの様子をすべてビデオ撮影した。

表３　実験の流れ

| セッション | 1 | 2 | 3 | 4 |
|---|---|---|---|---|
| 所要時間 | 10分 | 10分 | 20分 | 15分 |
| Ａグループ | 手さぐりゲーム | 箱　　庭 | 手当てゲーム | 質問紙記入 |
| Ｂグループ | 箱　　庭 | 手さぐりゲーム | | |

表４　手当てゲームの流れ

| | Ａグループ | Ｂグループ |
|---|---|---|
| １　回　目 | 当てられる役 | 当てる役 |
| ２　回　目 | 当てる役 | 当てられる役 |
| ３　回　目 | 当てられる役 | 当てる役 |
| ４　回　目 | 当てる役 | 当てられる役 |

最後に質問紙に答えてもらった。質問紙の内容は、両親から受けた身体接触の量、実験後の感想、日常の身体接触についてだった。具体的には以下の通りだった。

（１）両親から受けた身体接触

研究１で用いた質問項目10項目を採用した。子どもの頃（小学校低学年まで）に両親からうけた身体接触の程度を４段階で評定してもらった。

（２）実験後の感想について

ゲーム場面での、身体接触への抵抗感を測定するために質問項目を作成した。手さぐりゲームについて「ゲームは楽しかった。」「友達の手が触れることに抵抗があった。」「友達の手が触れることに、緊張した。」「また手さぐりゲームをやりたい。」の４項目に「7．非常にあてはまる」から「1．全くあてはまらない」までの７段階で評定してもらった。また手当てゲームは、当てる役の場合「当てる役は楽しかった。」「手を触れるとき抵抗があった。」「手を触れるとき緊張した。」「あてる役をまたやりたい。」の４項目、当てられる役の場合「手を出す役は楽しかった。」「手を触れられることに抵抗があった。」「手を触れられることに緊張した。」「手を出す役をまたやりたい。」の４項目について「7．非常にあてはまる」から「1．全くあてはまらない」までの７段階で評定してもらった。

（３）日常の身体接触について

現在の身体接触の状況を測定するために質問項目を作成した。質問項目は、「友達と話をする時に、友達に触れることがある。」「暇な時に、友達のからだに触れることがある（つつくなど）。」「冗談やからかいで友達のからだに触れることがある（くすぐるなど）。」「久しぶりに友達と再会した時に友達のからだに触れることがある（抱きつくなど）。」「友達を励ますときに、友達に触れることがある（「大丈夫」と肩に触れるなど）。」で、５項目は友達に触れることに関する質問で、残りの５項目は友達から触れられることに関する質問だった。計10項目の質問について、「7．非常にあてはまる」から「1．全くあてはまらない」までの７段階で評定してもらった。

## 結　果

（１）両親からの身体接触とゲーム場面と日常場面の友人との身体接触の関連

両親からの身体接触と、ゲーム場面に対する抵抗感、日常場面の身体接触との関連を検討するために、スピアマンの相関係数を算出した。その結果を表５に示した。

表5より、両親からの身体接触の量は、日常場面の身体接触の触れる側面（r=.44,p<.01）と、触れられる側面（r=.36,p<.01）の両方に有意な正の相関が見られた。しかし、ゲーム場面に対する抵抗感には、手さぐりゲームも手当てゲームにも相関が見られなかった。ゲーム場面の質問4項目それぞれについても相関係数を求めたが、両親からの身体接触の量と抵抗感や緊張感とは相関が見られなかった。ただ、両親からの身体接触の量と手さぐりゲームが楽しかったか（r=.32）、また手当てゲームの当てられる役をまたやりたいか（r=.41）という項目については有意な相関が見られた。

以上の結果から、両親からの身体接触の量が多いと、日常の友人との身体接触の量も多いことが明らかになった。しかし、両親からの身体接触の量とゲーム場面の身体接触に対する抵抗感には関係ないことが示された。

（2）ゲーム場面の身体接触と日常場面の身体接触

表5より、手さぐりゲームと手当てゲームに有意な相関が見られた（r=.54,p<.01;r=.66,p<.01）。つまり、手さぐりゲームに抵抗がない人は手当てゲームにも抵抗がないということである。しかし、ゲーム場面と日常場面の身体接触には有意な相関は見られなかった。このことから、ゲーム場面で友人と触れることと日常場面で友人と触れることとは異なるものであることが示された。また、ゲーム場面と日常場面の身体接触の抵抗感に関する平均評定値を表6に示した。この数値は高いほど身体接触への抵抗感が低いことを示している。表6より、ゲーム場面の評定値が日常場面の評定値よりも高かった。つまり、日常場面の身体接触が少ない人も、ゲームに関しては抵抗感が少なく楽しんだことが示された。

（3）身体接触における触れると触れられるの関係

身体接触において、相手に触れることと、触れられることはどのような関係があるのかを検討した。表5の結果より、手当てゲームの当てる役と当てられる役に有意な相関が見られた（r=.71,p<.01）。また同様に、日常場面の身体接触の触れると触れられるにも有意な相関が見られた（r=.66,p<.01）。つまり友人との身体接触において相手を触れることに抵抗がない人は触れられることにも抵抗がないという関連が示された。触れることと触れられることの違いは今回の結果からは明らかにならなかった。

（4）実際の身体接触

実際に友人とどの程度身体接触をするかが、両親との身体接触の量と関連しているかどうかを検討した。箱庭の場面で友人たちとどの程度身体接触するかをビデオで分析した。その結果、今回の箱庭の場面では身体接触はほとんど見られなかった。従って、身体接触の量に違いが見られず、両親との身体接触の量との関連を分析することができなかった。

表５　両親からの身体接触と友人との身体接触の相関係数

| | | 両親からの身体接触 | 手さぐりゲーム | 手当てゲーム（当てる役） | 手当てゲーム（当てられる役） | 日常触れる | 日常触れられる |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 両親からの身体接触 | | | | | | |
| ゲーム場面 | 手さぐりゲーム | 0.25 | | | | | |
| | 手当てゲーム（当てる役） | 0.07 | 0.54** | | | | |
| | 手当てゲーム（当てられる役） | 0.22 | 0.66** | 0.71** | | | |
| 日常場面 | 日常触れる | 0.44** | 0.15 | 0.2 | 0.03 | | |
| | 日常触れられる | 0.36* | 0.03 | 0.16 | 0.05 | 0.66** | |

表６　ゲーム場面と日常場面の身体接触抵抗感の平均評定値

| | |
|---|---|
| 手さぐりゲーム | 5.7 |
| 手当てゲーム（当てる役） | 5.6 |
| 手当てゲーム（当てられる役） | 5.7 |
| 日常触れる | 5.2 |
| 日常触れられる | 5.3 |

＊数値が高い方が抵抗感が低い

## 考　察

研究２の目的は、両親から受けた身体接触の量が、現在の友人との身体接触にどのような影響を与えるかについて検討することだった。

そこで、実験的な状況と日常場面を設定した。友人との身体接触は、ゲーム場面での身体接触には抵抗感をもつのか、日常場面で友人と身体接触をとるのかどうかという点に焦点をあてて分析した。また、友人とのコミュニケーション場面での実際の身体接触の頻度を測定するために、箱庭場面の観察も実施した。

分析の結果、子ども時代の両親からの身体接触の量は、日常場面の身体接触と有意な相関が見られた。つまり、両親からの身体接触の量が多いと、日常場面の友人関係においても身体接触が多いということが明らかになった。幼い頃、最も多く身体接触をとる相手は両親であろう。その両親からの身体接触が多ければ、それを学習して、その方法を友人にもあてはめて身体接触を行っていると考えられる。また、両親からの身体接触が多いということは、人に対する信頼感や安心感を持つことができるので、友人に対しても身体接触

という親しみの表現を多くするのではないかと考えらえる。

しかし、両親からの身体接触の量はゲーム場面での身体接触への抵抗感とは関連が見られなかった。このことは、ゲーム場面と日常場面の身体接触に相関がみられなかったことと関連している。つまり、ゲーム場面は日常場面とは異なっていたのではないかと考えられる。グループを日常的に親しい友人同士で組み合わせており、ゲーム場面は、遊びの場面で楽しい雰囲気であったため、手が触れることに抵抗感がなかったのではないかと考えられる。また、勝敗があり競争するために、手が触れたりすることに抵抗感がなかったのではないかとも考えられる。

このような強制的に触れることを目的とした二つのゲームに対して、箱庭の場面は、より自然に身体接触をはかることを目的とした。しかし、箱庭場面では身体接触がほとんど見られなかった。これは、日常場面とはまた違ったために、身体接触が見られなかったのではないかと考えられる。また、箱庭場面では物を置くことに集中しており、相手に触れるという行動は行われにくかったと考えられる。今回の実験では、状況設定がうまくいかなかった。今後、友人との身体接触を検討するために、より自然な身体接触が行われる場面設定を工夫するか日常の観察を行う必要があることが示唆される。

次に、日常場面の身体接触の触れると触れられるにつて検討した。触れると触れられるには有意な相関が見られた。また、手当てゲームの、当てる役と当てられる役にも有意な相関が見られた。以上の結果から、触れると触れられるは相手に対しての親密感を表しており、質が同じものであることが示唆される。

## 【総合考察】

研究１と研究２の結果から、子ども時代の両親からの身体接触は、大学生の親や友人からのサポート感、社会的スキル、日常の友人関係での身体接触と関連が見られることが明らかになった。山口（2004）が指摘するように、子ども時代の身体接触の重要性が、さらに示されたと言えよう。親や友人からのサポート感と関連しているということは、様々なストレス場面でのレジリエンスとも結びつき、やはり両親からの身体接触が大学生の精神的健康に影響を与えている可能性がある。

また、大きな精神的健康を損なわないにしても、友人との日常の親密さを伴うコミュニケーションの在り方にも影響を与えていることが示された。大学生では言語的コミュニケーションが主に行われていることは確かだが、非言語的な身体接触も無視できないコミュニケーションである。現代の人間関係の希薄化の指摘とともに、対面でのコミュニケーションにおける身体接触の役割をさらに検討する必要があるだろう。今回のゲーム場面の設定は、両親からの身体接触との関連を示す点では状況としてはうまくいかなかった。しかし、その一方で、このようなゲーム場面は、両親との身体接触が少なかった学生でも友人との身体接触に抵抗なくコミュニケーションをとれる場面であったとも考えらえる。従って、ソーシャルスキルの訓練の場としてのゲーム場面の位置づけも今後検討する必要があると考えられる。

## 【引用文献】

久田満・千田茂博・簑口雅博　1989　学生用ソーシャルサポート尺度作成の試み（1）日本社会心理学会第30回大会発表論文集,143－144.

菊池章夫　1988　思いやりを科学する　川島書店

Montagu,A.　1971　Touching:　The human significance of the skin. New York; Columbia University Press.

根ヶ山光一　2006　対人関係の基盤としての身体接触に関する発達的研究（1）－乳児における身体接触遊びの日英比較－　日本心理学会第70回大会発表論文集,1233.

高橋佳奈・松原璃・渡辺歩　2004　友人関係における信頼と依存―交際行動の違いについて―　大分県立芸術文化短期大学コミュニケーション学科吉山尚裕研究室卒業研究論文集,1－10.

山口創　2003　乳児期における母子の身体接触が将来の攻撃性に及ぼす影響　健康心理学研究,16,60－67.

山口創　2004　子供の「脳」は肌にある　光文社新書

山口創　2006　対人関係の基盤としての身体接触に関する発達的研究（3）－思春期の接触抵抗との心身の健康との関連－　日本心理学会第70回大会発表論文集,1235.

山口創・山本晴義・春木豊　2000　両親から受けた身体接触と心理的不適応との関連　健康心理学研究,13,19－28.

吉本あすか・渡邉菜奈　2001　女子短大生の友人関係―交友活動と感情・認知との関連―　大分県立芸術文化短期大学コミュニケーション学科藤田文研究室卒業研究論文集,22－35.

## 【謝　辞】

本研究を行うにあたって、情報コミュニケーション学科2005年度卒業生の上野しのぶさん、大木理恵子さん、徳田絵理子さん、永田三佳さん、秦令子さんの多大なるご協力をいただきました。ここに記して心から感謝申し上げます。本研究の一部は2006年日本心理学会第70回大会にて発表された。